

アースディ 2026KOCHI ビーチクリーンアップ&海ごみ会議 第一回「海ごみ会議」要約

日 時： 2026年4月18日（土）13：30～15：00

場 所： 岸本防災コミュニティセンター多目的室

主 催： 特定非営利活動法人環境の杜こうち
物部川 21 世紀の森と水の会

参加者： 54 名

1. 会議の目的と背景

● 全 4 回の連続会議

今年度中に計 4 回の会議を予定しており、第 1 回目となる今回は問題点の共有と、何ができるかを探る場として設定した。

● 社会的共通資本としての認識

海岸や自然環境を「住民の共有財産（社会的共通資本）」と捉え、行政に管理を委託しつつも、住民一人ひとりがどう関わるかを考えることをベースとする。

2. 現状の報告と課題

● 物部川流域・海岸の調査データ

配布資料により 2023 年 12 月から実施されているプラごみ調査結果が共有された。特に、「**地元の有志が日々ゴミを拾っている場所**」では、**ペットボトルの数が劇的に減少（1,360 本から 50 本へ）**している事例が紹介され、日常的な活動の重要性が示された。

● ゴミの発生源と性質

漂着ゴミは季節風や海流、大雨による増水などで繰り返し押し寄せる。地域によってゴミの組成は異なり、例えば大月町柏島では漁業系ゴミが 6～7 割を占める一方、物部川流域ではプラスチックゴミや農業系ゴミも目立つ。

● 行政の役割と限界

河川や海岸の管理者は、水防や安全確保を優先順位の第一としており、美化活動（清掃）については予算や事務分担の範囲内で、住民ボランティアと連携・支援する形をとっている。

3. 提案された「掃除の仕組み」

モデレーターより、以下の 3 つの層で掃除を捉える仕組みを提案した。

- **大掃除:** 行政主催のイベントや、広報を目的とした大規模な清掃活動。
- **中掃除:** 市民団体などが定期的に開催し、多様な参加者を募る活動。
- **小掃除:** 地域住民やサーファー、観光客が日常的についでに行う活動（これが動き出すことを重要視している）。

4. 参加者からの主な意見・アイデア

(1) 参加のハードルを下げる工夫（エンターテインメント・ゲーム性）

ゴミ拾いを「義務」ではなく「楽しさ」に変えるためのアイデアが多く提案された。

- **スポーツゴミ拾い**

チーム対抗で拾ったゴミの量を競うゲーム形式にすることで、子供たちが楽しみながら積極的に参加できる仕組みが紹介された。

- **アクティビティとの融合**

カヤックを使って、陸路からは行けない場所に溜まったゴミを回収しに行くなど、エンターテインメント要素を持たせることで、環境問題への意識を広げる工夫が提案された。

- **表現活動との連携**

ダンススタジオの子供たちが実際にゴミ拾いを体験し、その経験を舞台での表現力向上に繋げるといった、異分野との連携も行われている。

(2) 持続可能な経済的・社会的仕組み（インセンティブと費用負担）

活動を継続させ、参加者にメリットを還元するための仕組みが議論された。

- **有料ゴミ袋の活用（沖縄モデル）**

観光客におしゃれな有料ゴミ袋（例：500円）を購入してもらい、拾ったゴミの分別や処分にかかる費用をその代金で賄う仕組みが提案された。

- **地域通貨・ポイント制度（ビーチマネー）**

拾ったシーグラス（通称：ビーチマネー）を地域のお店に持っていくと、サービスや景品と交換できる仕組みなど、楽しみながら地域経済にも貢献できるアイデアが出された。

- **ボランティアから「仕事」へ**

予算を確保し、ゴミ回収をボランティア任せにするのではなく、実効性のある「仕事」として外部委託できるような仕組み作りが必要であるとの意見もあった。

(3) 「小掃除（こそうじ）」を支えるインフラ整備

日常的なゴミ拾い（ついでに拾う「小掃除」）を定着させるための具体的な課題が指摘された。

- **ゴミステーションの設置**

サーファーや散歩中の人々が「ついで」に拾ったゴミを置いておける場所（ステーション）の設置が不可欠であるとの声が多く上がった。拾っても置く場所や回収の仕組みがないことが、日常的な活動の妨げになっている。

- **行政の回収・処分ルールの明確化**

個人や小グループが拾ったゴミについて、どこが管理（国・県・市）する海岸かによって回収ルールが異なる現状を整理し、スムーズに処分できる連携体制（パートナーシップ）の重要性が語られた。

(4) 教育と意識改革

「捨う」こと以上に「捨てない」人を増やすための教育的な視点も重視された。

- **子供の達成感の活用**

子供たちはゴミを拾って「目に見えて綺麗になる」ことに強い充実感と満足感を抱いている。この成功体験を次世代への意識付けに活用すべきとの意見があった。

- **発生源へのアプローチ**

「なぜゴミが流れてくるのか」を子供たちと一緒に考え、海洋ゴミの問題を自分たちの生活と結びつけて学ぶ「環境学習」の重要性が強調された。

- **「マシな状態」の継承**

完璧を求めるのは難しくても、活動に関わる人を一人でも増やし、次世代に「よりマシな状態」で環境を引き継ぐという考え方が共有された。

5. 今後の予定

会議は今後、7～8月、10月、そして1月または2月の計3回開催する予定。今回の議論を踏まえ、次回以降も具体的な素材や知恵を持ち寄り、予算化や実効性のあるルール作りを目指していくことを確認した。

以上